

# 谷崎潤一郎

出席者

野口武彦 司会

大久保典夫

笠原伸夫

出口裕弘

野村尚吾



「この繪は刺青と一緒にお前にやるから、  
其れを持つてもう歸るかい」

かう云つて清吉は巻物を女の前さし置いた。

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さりと捨て、しまひました。

——お前さんは眞先に私の肥料になつたんだねえ」

と、女は劍のやうな瞳を輝かした。

その耳には凱歌の聲がひいて居た。

「歸る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はかう云つた。

女は黙つて頷いて肌を脱いだ。

折から朝日が刺青の面をさして、女の背は燦然とした。——刺青より

シンポジウム 日本文学

16

## 出席者略歴

のぐち・たけひこ 一九三七年生まる。東京大学大学院中退。現在神戸大学助教授。主要著書は『三島由紀夫の世界』（講談社）『江戸文学の詩と真実』（谷崎潤一郎論）（以上中央公論社）など。

おおくば・つねお 一九二八年生まる。早稲田大学大学院修了。現在東京学芸大学助教授。主要著書は『岩野泡鳴』（南北社）『転向と浪漫主義』（審美社）『昭和文学史の構想と分析』（至文堂）『昭和文学の宿命』（冬樹社）など。

でくち・ゆうこ 一九二八年生まる。東京大学文学部フランス文学科卒業。現在一橋大学教授。主要著書は『ボードレール』（紀伊国屋書店）『行為と夢』（現代思潮社）『京子変幻』『天使扼殺者』（以上中央公論社）『楳田の眼』（潮出版）など。

かさはら・のおお 一九三二年生まる。日本大学文学部卒業。現在日本大学助教授。主要著書は『中世の発見』（思潮社）『美と悪の伝説』（桜楓社）『虚構と信念』（国文社）『地獄論』（大和書房）など。

のむら・しょうこ 一九二二年生まる。早稲田大学文学部卒業。毎日新聞記者を経て創作活動に入る。主要著書は『谷崎潤一郎』『風土と文学』（中央公論社）『浮標燈』（集英社）『伝記谷崎潤一郎』（六興出版）など。

司会者の瞭解により検印を省略します 5101

シンポジウム日本文学 16

谷崎潤一郎

昭和51年1月15日 初刷印刷

昭和51年1月20日 初刷発行

司会者 野口武彦

発行者 鶴岡 隆 巳

発行所 株式会社 學生社

東京都千代田区九段南2-2-4(郵便番号102)

電話 03 (263) 2611(代) 振替・東京18870番

編集担当 土屋 晃三

落丁・乱丁本はおとりかえます

Printed in Japan

# 谷崎潤一郎

出版

野口武彦 前巻

大久保典夫

笠原伸夫

出口裕弘

野村尚吾

日本文学

16

出席者

野口武彦司会

大久保典夫

笠原伸夫

出口裕弘

野村尚吾

装幀

杉浦康平＋鈴木一誌

『シンポジウム』日本文学——谷崎潤一郎・目次

はじめに.....九

## 第一章 谷崎潤一郎——その文学的出発

《報告》 出口 裕弘

美と悪とエロスの三位一体.....一四

自然主義と悪魔主義の相互滲透.....二

文学における父性原理と母性原理.....六

エロティシズムの理論によるマゾヒズムの把握.....九

谷崎はたして女を描いたか.....一〇

○ 小田原事件の投影.....一〇

潤一郎の生活圏と文学空間.....一〇

潤一郎とヘルマフロディティズム.....一〇

潤一郎における実作倫理と虚構.....一〇

## 第二章 関西移住と古典回帰

《報告》 笠原 伸夫

関西移住の内的契機と外的契機.....二

潤一郎における西欧と日本.....二

関西の文学的風土.....二

潤一郎と鏡花.....二

谷崎文学への関西の登場.....二

|                     |   |
|---------------------|---|
| 『蓼喰ふ蟲』の問題をめぐって      | 二 |
| 昭和初年代の連作            | 三 |
| 政治におけるエロス、エロスにおける政治 | 六 |
| 谷崎の古典世界と『源氏物語』現代語訳  | 六 |

### 第三章 小田原事件から『細雪』まで

《ゲスト》 野村尚吾

|                |    |
|----------------|----|
| 潤一郎の最初の恋愛      | 七  |
| 青春遍歴とマゾヒスト開眼   | 一〇 |
| 三姉妹との交渉        | 一〇 |
| 石川せい子の出現       | 一〇 |
| 同棲生活の倫理        | 一〇 |
| 大正期恋愛の特質       | 一一 |
| 小田原事件から妻君譲渡事件へ | 一三 |
| 古川丁未子との結婚      | 一五 |
| 根津松子との邂逅       | 一七 |
| 女性的世界の構造       | 一三 |
| 『細雪』の空間        | 一五 |
| 『細雪』の日常性とデカダンス | 一三 |
| 戦時下の潤一郎        | 一六 |

## 第四章 谷崎潤一郎と戦後

△報告△ 大久保 典夫

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 谷崎における二つの戦後……………          | 四〇 |
| 老人における死とエロス……………          | 四四 |
| 戦後文学における谷崎・谷崎における戦後……………  | 四八 |
| 『細雪』から『少将滋幹の母』へ……………      | 五〇 |
| 戦後の性解放と『鍵』……………           | 五三 |
| 谷崎と大逆事件……………              | 五五 |
| 『鍵』とピエール・クロソウスキー……………     | 五八 |
| 谷崎の性描写の問題……………            | 六三 |
| 『夢の浮橋』をめぐる……………           | 六九 |
| 最後の高峰『瘋癲老人日記』……………        | 七三 |
| 谷崎文学の位置づけ……………            | 七五 |
| 「思想のない作家」という在来評価をめぐる…………… | 八二 |
| 谷崎における伝統受容……………           | 八六 |
| 結語——谷崎王朝の終焉以後……………        | 八八 |
| あとがき……………                 | 九〇 |
| 作品年表……………                 | 九三 |
| 解説・注……………                 | 九四 |
| 索引……………                   | 九六 |

谷  
崎  
潤  
一  
郎



## はじめに

野口 これから谷崎潤一郎について、充実したお話を伺いたいと思います。

問題提起をされる順にご紹介申し上げますと、まず出口裕弘さんはフランス文学の専門家であり、ボードレールをはじめとするフランス象徴主義文学と、ジョルジュ・バタイユに代表されるようなエロティシズムの主題をずっと研究のテーマにされてきた方です。今回は初期の谷崎潤一郎が吸収した西欧ロマン主義ないしはデカダニズム、耽美派の影響の角度から、比較文学風の論点について問題提起をしていただけたらと存じます。

つぎに笠原伸夫さんは、主として江戸文学における美と悪の伝統、庶民文学の奥底に蓄積され、かつ噴出してきた官能的なもの、非合理的なもののエネルギーから光を照射するというかたちで近代日本文学の側面についてお考えになってこられたというふうに申し上げてよいかと思っています。

「関西移住と古典回帰」と題した第二章では、笠原さんに谷崎文学の幼児体験、あるいはむしろ無意識の原質というべきものにさかのぼっていくかたちでお話が伺えたらと思うわけです。出口さんにご担当いただく第一章の西欧文学が谷崎によって吸収された知的栄養分というものであるとしたら、第二章の前近代文学は、いわば谷崎文学がそこに根づいたところの土壌であるといういい方が可能ではないかと思えます。そのへんのところをどういうふうに重層的に把握するかということが、あとのディスカッションの一つの中心になればというふうに考えているしだいです。

つぎに野村尚吾さんは、谷崎潤一郎の伝記の筆者でいらっしゃいますし、生前の潤一郎に直接、師事されたこともあって、今回は谷崎の風貌に接した興味深いお話が伺えるのではないかと期待しています。野村さんには問題提起という

かたちではお願いしなかったわけですが、谷崎文学の成立に終始重要な働きをしてきた実在の女性たちの姿、そうした女性群像が谷崎文学におけるいわゆる「永遠女性」のイメージにいかにも昇華されていたかという文学者の秘密のようなものについて、お話を展開していただけたらと思います。もしも可能だったらこれまで門外不出だった秘話のようなものというふうに欲張っているのですが、それはどうなりますか……。

最後に問題提起していただく大久保典夫さんは、明治、大正期の文学の専門家でいらっしやいまして、岩野泡鳴論などをはじめとして、自然主義文学と耽美派運動との接点、あるいは境界領域のご研究からスタートされて、近代文学史の枠組そのものを変えていこうとするお仕事にかかわってこられたというふうに、私なりに理解しております。

「戦後の谷崎潤一郎」と題した最終章では、とうぜん文学史上の戦後とのかかわり、あるいは性の主題性、老人文学といったようなテーマが提起されると思います。同時に谷崎の長い文学的キャリアが成熟と深化に達する生涯の総決算として、谷崎がなしとげた仕事の総体は、日本の近代文学にとって、あるいは現代の日本文学にとって、ついに何であったのかという問題にまで討論が絞られていったらというふうに期待しております。

以上のように、四つの柱を立てて全体を構成してみたわけですが、やり方としてはもちろんほかのやり方も可能ですが、たとえば、いくつかのテーマを拾い出して、問題論風に構成することも可能であるわけです。ちょっといいわけじみですが、つい最近、谷崎潤一郎について一冊の本をまとめたので、その枠組でしかものが考えられない状態なので、それを避けて非常に単純な時期区分という構成をとってみたわけです。もちろん、機械的な時期区分からはカバーしきれない問題点も多々出てくると思いますが、それは皆さんが提起されるさまざまなテーマとのかかわり合いで、何とかカバーして、処理していけるのではないかというふうに思います。

谷崎潤一郎についての定説、むしろ定説というべきかもしれませんが、「思想のない作家」という評言が、ずっとなされてきています。そういう否定命題をもって、これだけの大文学者を日本近代文学の中で位置づけるということは、非常におかしな話です。その点では、今日ご列席くださった皆さんは、谷崎という作家を近代以前から、

あるいはもっとさかのぼって王朝文学からの日本古典文学におけるエロティシズムの系譜の上で——しかも谷崎の場合には、それがマゾヒズムというかたちで、非常に個性的に構造化されているということがいえるわけですが——とらえていき、さらにその上で、日本近代文学の新しい主流を定立しようというご発想の点では、基本的な一致が図れるのではないかと思います。

もちろん、シンポジウムというのは、対立点があればおもしろくならないのですが、そこはそれぞれに一言ある方々でいらっしゃいますので、口角あわを飛ばすような白熱した大議論にまで発展するのが非常に楽しみです。以上のようなことを前おきにして、出口裕弘さんから最初の問題提起をしていただきます。



## 第一章 谷崎潤一郎——その文学的出発

## 一 文壇への登場

谷崎の『刺青』が「新思潮」に発表されたのは、明治四十三年（一九一〇年）である。翌四十四年には「三田文学」誌上で永井荷風の激賞を受け、桧舞台の「中央公論」に『秘密』が掲載される。以後、大正十二年の大震災まで、潤一郎は新進、異色の作家としてひた押しに仕事を重ねていった。いわゆる谷崎の「初期作品」である。一般にこの時期の作品は玉石混交とみなされ、谷崎文学全体のなかであまり高い評価を受けていないようだ。事実、大正二年発表の『熱風』に吹かれて』とか、大正三年の『捨てられるまで』、大正八年の『富美子の足』などは、谷崎自身、失敗作として生前の全集には入れようとしなかった。『刺青』は構成も文体も端正にととのった耽美主義の小品だが、谷崎は奇に偏った名品だけを工芸品のように連ねてゆくタイプの作家ではなく、むしろ自分から端正な形を壊して、文体を構成もきわめて大味な告白小

〈報告〉 出口裕弘

説めた作品を並行して書いていった。『人魚の嘆き』や『魔術師』の発表された大正六年に、あの赤裸々な自伝的小説『異端者の悲しみ』が発表されているのは象徴的である。やがては大谷崎といわれるに至る作家の試行錯誤の時期にはちがいないが、震災までの谷崎文学は、玉石混交であればあるほど、豊富な問題を提出しつづけているといっているまいだろう。

## 二 谷崎のエロティシズム

この時期の谷崎は昔から「悪魔主義者」などと呼ばれ、ボードレールやボオやワイルドの安っぽい模倣が目につき、総じて底が浅い、という批評が一般だった。しかし谷崎はボードレールなど英訳で想像以上によく読んでおり、その散文詩をいくつか翻訳したりしている。しかもそれがかなり上質の翻訳なのである。谷崎の欧米文学理解を一概に浅薄なものだったときめつけることはできないと思う。キリスト教的風土に深く根を張った欧米文学の

「悪」と、谷崎文学のいささか泥絵具式の「悪」とを、平面的に並べてみても大して意味はない。谷崎の場合、「悪」は倫理的であるよりもむしろ、「美」や「エロティシズム」に密着した、内的昂揚の契機でしかないことが多いのだ。エロティシズムをこそ前面に押し出して、初期の谷崎文学を考えた方が捷徑であるかもしれないのである。フランスの作家・思想家ジョルジュ・バタイユは、エロティシズムの体系的研究と、実作品への結晶化とともに成就した人物で、周知のように三島由紀夫に深刻な影響を与えた。バタイユの理論は、もっぱら能動的、攻撃的な男の立場から構築されたもので、マゾヒスティックな溝一郎にそのまま適用するのは無理だが、エロティシズムに焦点を絞って谷崎文学を考えてゆく場合の参考になることはまちがいあるまい。そのほか、世紀末デカダン文学の旗手から、一転して純度の高いカトリック作家に

### 美と悪とエロスの三位一体

出口 私を担当させていただくのは、谷崎潤一郎の文学的出発から、大正十二年の関東大震災のころまでです。

大きく分けて初期に入る谷崎潤一郎の作品というのは、私もあらためて意外と思ったほど大量にあるわけです。出発点で代表作とみなされている『刺青』とか、『秘密』とか、『少年』はそれなりに評価が確立している作品だと思えます。ちょっと大ざっぱに類別してみると、『刺青』、『麒麟』、あるいは『秘密』、少し先にいって、『人魚の嘆き』、『魔術師』、『人面痘』、『白昼鬼話』、『柳湯の事件』のような偏奇の小説が、谷崎潤一郎の特徴であることはいうまでもありません。

なったユイスマンスなども話題にしたい。『彼方』や『さかしま』のデカダンスを、谷崎の初期作品と比べてみるような試みもあっていいと思う。

### 三 谷崎と荷風・鏡花

荷風との比較、鏡花との共通性や異質性なども当然問題とすべきだろうが、特に私は谷崎文学の「語り」について考えてみたい。震災までの谷崎文学には『信西』『恐怖時代』その他多くの戯曲作品があり、対話体小説のうまさも際立っている。谷崎文学は本質的に「語り」の、「譚」の文学だ。近代日本文学の主流たる「私小説」との関係において、ともすれば通俗の名のもとに排撃されがちな「語り」、「譚」の文学の巨匠として、谷崎をあらためて掘り上げてみたらどうであろうか。

耽美主義、悪魔主義で一貫している非常に偏った作家が西欧にはいるわけですが、それで一貫すれば、ひょっとすると非常にまとまったマイナーな、しかし研究者の側からすれば論の立てやすい作家になったのではないかと思います。

しかし、これはもう常識ですが、それとほとんど並行しながら、反自然主義として出発した作家としては、極端に微に入り、細をうがったしつこいリアリズムもあります。谷崎は自分の少年時代の些末事を克明に記憶し、喚起する特殊な能力をもっているのですが、それを少しずつ虚構化しながら、半自伝風に書いた作品というのは、非常にたくさんあるわけです。『悪魔』、『續悪魔』という作品にしても、これがはたして『秘密』や『刺青』の系列に入るかというところ、少し違うのではないでしようか。大正二年あたりには、谷崎自身があまり気に入らなくて顧みなかったような『熱風』に吹かれて』とか、『捨てられる迄』という作品があるのですが、その系統をたどっていくと、『神童』、『鬼の面』や、大正六年——『人魚の嘆き』や『魔術師』、『玄井三蔵』の書かれた年——に発表された、非常に赤裸々に、苦境にあった自分の家庭を残酷なほど細密に描写した『異端者の悲しみ』というかなりの大作があります。あるいは、私が非常におもしろいと思っている大正八年の『呪はれた戯曲』という小説の前半の部分にも、その当時の谷崎潤一郎の私世界の影が、虚構化されながらではあれ、かなり濃く、リアリティックに投影されているのではないかという気がしました。

その傾向は一貫しているわけで、いずれ『蓼喰ふ蟲』に流れ込んで、いよいよ谷崎潤一郎の世界として成立していくわけです。その意味では、初期の谷崎潤一郎が悪魔主義者、耽美主義者というふうにいわれること自身が、はたして正鵠を射ているかどうかという問題が一つあると思いますので、あとでまたいろいろご意見を伺わしていただきたいと思っています。

(注二)

私たちは昔から初期の谷崎について、「ボードレールを浅読みした谷崎の悪魔主義」とか、「いくら悪がってみせても、唯一神と悪魔の対立というキリスト教風土から、原罪意識を裏側に伴いながら成立してきた西欧的な意味での悪と、谷崎の描いている悪は何の関係もない、谷崎のは非常に浅いものだ」という冷笑的な評語はすいぶん説まされてきたわけです。私はおそらく永井荷風よりはるかに深く日本的な風土に根を下している谷崎潤一郎において、そういうものがポ